

往復書簡
(前編)

青森県で、りんご農園「山善 齊藤農園」を経営する齊藤寿さん。完熟堆肥と有機質 100%の肥料のみの土作り、太陽の光が隅々までいき届く“わい化栽培”、そして「りんごは子供、畑は我が家」の想いで、たっぷりの愛情を注いで「陽だまりりんご」を栽培しています。

拝啓 高木 勇樹 様

青森県の年明けは例年になく暖かで、雪の少ない日々が続いており、異常気象を実感している毎日です。

今回ご縁があり、高木様と手紙のやりとりができることを、とても光栄に思います。

私の住む青森県板柳町は、就業人口の約4割が農業に従事し、りんご栽培が基幹産業の町です。私も、約100年続くりんご農家の4代目です。

3代目だった父は、私が25歳の時に急逝しました。まだ就農3年目だった私は、栽培技術や販売力など何も持たないまま経営を譲されたのです。当時は十分な知識や経験がなかったため、とにかくりんごの安定生産を目指し、栽培面から見た経営の10年計画を立てて努力を重ねてきました。あれから13年が過ぎ、栽培技術も身につく、品種構成など園地整備も一定のレベルに達し、栽培面での成果もでてきました。

それに伴い、今後10年の新たな経営を創造する時期になりました。当農園の現状をみますと、一番の問題は労働力です。家族労働力が母と私の2人、年間雇用1人、季節雇用5人(延べ約900人)です。妻は会社勤めをしています。10年後には、母が70歳を超えますし、季節雇用もすでに高齢の方がほとんどなので、雇用確保と従業員の若返りが急務となっています。そのため、人材を確保するには、収益向上を目的とする販売面から見た経営の10年計画を立てる必要があると考えています。

地域の農村でも後継者不足、農業人口の高齢化や労働力不足などの問題は深刻です。地域の今後、雇用確保や安定した技術の継承などを考えると、「職業」≡「法人化」(適切な言い方かわかりませんが)に向かうのがベストかも知れないと思います。

しかし、その一方で日本の農業は、「先祖代々守ってきた土地」などと言われるように、「家業」≡「個人」として代々受け継いできた農業が主だと思えます。私が住む地域もそんな農家がほとんどですし、そこには、その土地で守ってきた技術や文化、風習、伝統の継承など、多機能的な意味があり、これらも守っていくべき大きなことだと思えます。

また、それぞれに問題点もあります。前者(法人)は、栽培技術の継承に長い時間を要すること、労働力の確保競争では、地域の大企業と比べて給与などの待遇面で不利であることなどが挙げられます。また、自分の子供に継承してほしいという思いも当然あります。

後者(個人)は、私がそうだったように安定した技術の継承ができない場合があり、持続性に疑問を感じます。また販売面などを考えると、やれることには限界があります。

今後を見据え、経営を創造していく中でどちらに舵を切っていくべきか悩んでいるところです。農業に携わっている以上、農業が産業として明るいものであってほしい、家族のために良い経営に向かいたい、そして、そのために努力していきたいと思えます。

良きアドバイスがあればお願いします。

平成二十八年二月吉日

敬具

齊藤 寿(さいとう ひさし)

1977年 青森県生まれ

2000年 就農

2002年 山善 齊藤農園の代表となる

太陽の光をたっぷり浴びた「陽だまりりんご」(葉とらずサンふじ、シナノゴールド、王林、トキなど)の栽培・販売、陽だまりりんごを使った完熟りんごジュースの販売などを行う



拝復 齊藤 寿 様

新年を迎えたと思ったら早や2月も立春を過ぎ、時の移ろいの速さを実感する日々です。

雪が少ないという触れ込みでしたが、先頃の大寒波は南国沖縄・台湾にも及んだようで、御地ではドカ雪に見舞われたのではないのでしょうか。正に春浅し、被害が出なかったことを祈っています。

青森県板柳町とお聞きし、今から35年ほど前に事務秘書官(正確には農林水産大臣秘書官事務取扱、専ら大臣と役所との連絡役、甘利大臣問題で登場した政務秘書官とは全く役割が異なる)として1年間お仕えた田舎館村ご出身の故田澤吉郎農林水産大臣と青森の春夏秋冬を想い、本当に懐しく何かのご縁を感じました。

三沢空港から田舎館村までの雪道、春の純白で薫風漂う見渡す限りのりんご園、弘前城の幻想的な夜桜、夏のねぶた、秋の追入瀬の紅葉など、誠に焼きついていきます。

大臣の家でも、奥様が主役で何へクターか、のりんご栽培をされており、苦労話をお聞きました。

山善(は、屋号ですか) 齊藤農園のHPをプリントアウトしたものを拝見すると、35年前とは隔世の感のある多種多様な品種、またこれを栽培する技術の進化が私のような素人にも良く分かります。

多品種であるのは需要の多様化への対応と収穫時期分散によるリスク回避もあるのでしょう。ジュース加工の取組みもその一環でしょうか。

また、それを可能にするため、様々な品種改良と栽培技術の改良、それを経営に活かしていく創意・工夫・努力のこれまでが、お手紙からひしひしと伝わってきます。

しと伝わってきます。

今、不惑の年を眼前にして、経営の舵をどちらに切るか、就労16年目で当然来るべきひとつの節目を迎えたと、まず平然と受け止めてください。

ここで、これまでの経営を支えてきた要素(経営資源)を、例えば、人材(経営者、ご家族含めた雇用者)、農地(規模)、技術、企画・販売(マーケティング)、管理(マネジメント)、収益(資金手当て、利益)方などに分解し、その変遷を客観的指標(数字)で把握し、そこからこれまでの経営のモノサシは何だったのか整理してみてください。

貴兄の経営の強み、弱みが客観的に見えてくるはず。節目を乗り切る舵の取り方を考える指針となると思います。もうお済みでしたら、念のため、もう一度、やってみてください。

その上での考えを次回お聞き出来たらと思います。

敬具

平成二十八年二月吉日

高木 勇樹(たかぎ ゆうき)

一九四三年 群馬県生まれ
一九六六年 東京大学法学部卒後農林省入省、食品流通局砂糖糖課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官などを歴任
一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官
二〇〇二年 榊農林中金総合研究所理事長
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長
現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力

